

旧約聖書の生命観

川田 殖

旧約聖書は古代世界における代表的宗教民族の一つであるイスラエル人の歴史・文学・信仰の結晶である。本稿はこの旧約聖書のうちに見られる生命観の特徴を、その民族の歩みと信仰に関わらせながら探り、それがやがていかなる点で一民族をこえて全人類への遺産となりえたか、また今後もありうるかを、できるだけ聖書本文に即して考察しようとするものである。

キーワード： 旧約聖書、生命観、いき（息）

1

長い人類の歩みの中で、いかなる民族も酒と宗教を持たぬものはないといわれる。酒についてはしばらくおき、宗教といわれる現象は、こんにちにおいては、科学の圧倒的勢力の前にその影が薄くなったとも見られるが、しかしそれはその宗教というものに一定既成の歴史的型態を予想した先入観からくるものも多く、それを個人としての、また社会の一員としての「人間を支えている究極のものへの依存」というふうを考えるならば、宗教は依然として、いなくとも人類の存続する限り永遠に、続くものと考えていることができるであろう。

人類の生存の具体的な型態はさまざまであるが、それがどのような形をとるにせよ、人間は、みずからの生存の危機に立つ時、たとえどんなにおぼろげな仕方であっても、「生死の自覚」ともいべきものを抱いたことは争われない。その危機はある時には自然の運行の不調による生活物資の不足という形をとることもあったであろう。また天変地異によるみずからの生命そのものへの直接急激の脅威という形をとることもあったであろう。このような危機に立って人間は、みずからの生活力の不足を感じ、その力の増大を祈り願い、その祈願に促されて、危機をのり越えようと努力することになったと考えられる。そしてここに宗教の起源があり、ひいては「人間活動の所産」としての文明の起源があったともいえよう。だとすれば宗教も文明も人類の発生とともに始まるもの

だということができる。

2

宗教と文明の関係いかにというような大問題をここで扱うことはできないが¹⁾、ただひとつここに注目しておくなくてはならないことは、「人間を支えている究極のもの」に関わる宗教が、「人間活動の所産」としての文明のうちに含み切れないものをもっているということである。それはちょうど、人体の生存にとって不可欠な酸素が、体内においては生産されず、呼吸という外物摂取の作用を通じて、自己の外から体内に運ばれ、そこでの精妙な化学作用によって、人体の生存に必要なエネルギーに変えられるという現象に似ている。

さきに一言した人間の「生死の自覚」が「生老病死」の主体としての人間の生命の自覚につながって行くにはなお相当の時を経なければならなかったにせよ、生死という現象には個としての人間を超えた何ものかの作用が働いているという漠然とした感じを人類は早くから抱いていたと考えられる。人間生命の根源を「氣」とした道教、個的生命（ātman）の根源を宇宙的生命（brāhmana）とした印度教、人間生命は究極的には「いぶき」(pneuma) によるとしたギリシアやイスラエルの思想にこれが見られるのは、前述酸素の比喩と思えば興味ぶかいことである。

むろんこれらの思想を含むこれらの文明圏は単純に同一だということではできず、その展開の姿は相当に違ったものとなったが、またそれはこんにちの文明を豊かにするために有意義なものでもあったが、この中で生命の間

題を宗教との関わりにおいて比類なき深さと広がりをもってとらえた思想として、イスラエルのそれはきわめて意義深いものであった。それはこんにち『旧約聖書』とふつう呼ばれる聖典のうちに散在しているが、この聖典は、その直系であるユダヤ教のほか、キリスト教やイスラム教の経典ともなされていて、こんにちの世界においても重要な意味をもっている。その生命観の深さと影響という両面から考えてみて、これに思いをひそめておくことは、世界的規模で思考し行動して行くことを求められているこんにちのわれわれにとって一つの責務であろう。

3

民族の思想の展開はその民族の歩みそのものと切り離すことができないが、このことはとくにイスラエル民族に妥当する。彼らは史上稀なほどの波瀾万丈、有為転変の生活を続けながら、しかも三千年以上にわたって、世界史ことにその思想史、経済史の上に確固たる地歩を占め続けてきた民族であって、その活力(生命力)の根源を彼らの経典である旧約聖書の中に見出すことができるからである。それはその名「神(エール)と争う(イスラ-者)」の示すように、民族の存亡というものが、その精神生活の根本といかに深いかかわりのあるものであるかを示す典型的な例とさえ言うことができるであろう。ここではその歩みをたとえ概略的にでも辿ることはできないので、注目すべき二、三の点にのみ言及しておくにとどめたい。

彼らの精神の歴史の歩みは、まず、彼らの元来の故郷であったエウフラテス河畔の都市ウル(Ur)を後にして、パレスチナに移住するくだりから始まる²⁾。移住の理由は聖書には神の示しと記されているに過ぎないが、それは生活に便利な土地、好適な環境を求めての移住ではなく、故郷に流行しつつあった多産豊穡神への信仰の結果、種々の(ことに性的)不道徳がはびこり、民族の存亡が問われるようになったからだと推せられる。こうして彼らはアブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ伝説に示されるように、安住の地を求めて幾世代、放浪にも似た生活を送らなければならなかった。しかしその間に彼らは、共に旅し、その生活、生命を支え導き、それに従う限り民族の繁栄(祝福)を約束する存在を彼らの「人間を支えている究極のもの」、つまり「神」ととらえ、これを信じてこれに従うことを民族生存の根本としたのである。

この自覚がさらに深まり、一つの特徴ある生活様式を彼らに与えることになった決定的なできごとはいわゆる「出エジプト」と「十誡」賦与という事件であり³⁾、そこに示された神の恵みのできごととこれに対する決断的応答とがイスラエルの民族生存の基盤と受けとられるようになった⁴⁾。以後この精神が旧約律法書の中核たる「モーセ五書⁵⁾」を中心に、種々の解釈附加を加え、ついには「タルムード⁶⁾」という形をとって、彼らの生活の隅々にまで滲透し、こんにちのイスラエルのあり方にまで大きく働いていることはいうまでもない。

4

そのあり方は一見、一民族の他民族への攻略、侵入以外の何ものでもないように見える。しかし古代における民族移動はこんにちにおける侵略戦争とはいささか趣きを異にし、生活の必要上やむをえざる移住の要素を多分に含んでいたものと思われる⁷⁾。それは異境にあってささやかな食物を求め、墓地を求めるようなものであったかも知れない⁸⁾。しかしその中にも異民族・異種族との円満な契約関係がかならずしもつねに成立したわけではなく、時にはかなり深刻な軋轢が避けられないこともあった。ここから起る外交・戦争はひとつの政治的決断であるが、彼らはこれらの決断をなすに当たっても、自己の利害休戚を無条件に優先させるのではなく、まずそれが正義であるか公平であるかを自己に問い、そこに利己的な動機がいささかでも混入している時には、みずからの神から峻厳な処罰を受けることを自覚した⁹⁾。旧約聖書における歴史記述にはむろん、他国におけるそれのように、しばしば民族中心の愛国感情が見られるが、しかしその歴史観・国家観の中心を貫くものは上に見た正義・公平の原理であり、これが将来におけるイスラエル民族を世界的国際的視野のもとに行動させる根源となるべきものであった。こうしてやがて彼らの神は、民族の神である以上に、正義の神となるべきものであった。

5

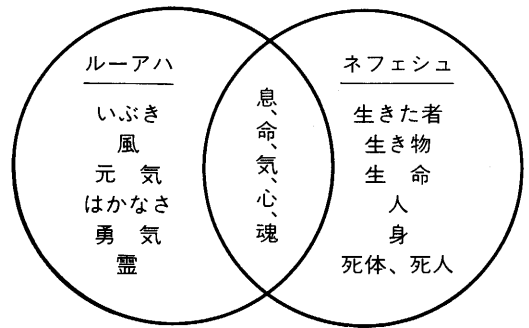
しかるに現実はいかなるにせよ、これと背反する人間の悪の姿を如実に現出することもしばしばであった。旧約聖書は、たとえばダビデの例に見るように¹⁰⁾、いかなる名君・君子も神の前では弱点欠点があることを示して仮借

がないが、このことは専制的君主と反抗的国民との争いから起った王国分裂（南北朝）時代において特に著しく、殆んど人間悪の極限を示しているような印象をさえ読者に与える¹¹⁾。そして上述神と民との正しい関係に立ち返るべきことを絶叫した予言者の声も一見むなしく、国は滅び民は散り、イスラエル民族は歴史の舞台から消え失せたかに見えたのである。

普通の民族ならばこれで大抵はおしまい、他国の征服占領下に民族のアイデンティティーは失われ、種族混濁が起り、民族の跡はもはや歴史的回想にすぎなくなるのが大抵であるが、イスラエル民族は、前述のように、そうはならなかった。それは亡国の現象が、古代社会で普通考えられるように、その民族の神の敗北ではなく、正義の神に叛いた民の敗北であって、民が改悛して神の正義のもとに立ち返れば、生命の源なる神はかならずやイスラエル民族（ひいては他の民族）を復興させ、本来の繁栄（祝福）に至らせるとの予言者たちの教導が支えとなったからであった¹²⁾。このようにしてイスラエルは、民族復興を目あてに、父祖伝来の契約と律法に立ち返り、厳格な道徳的生活のうちに、神をあがめ、民族としての存続を続けることになった¹³⁾。それが1948年に至るイスラエル民族の歩みであり、イスラエル民族はこのことを神の約束の一つの成就と見ているのである。

6

旧約聖書の生命把握もこのような民族の歩みと相表裏している。生命に当るヘブル語にはネフェシュ（nephesh）、ハーヤー（chāyāh）、ルーアハ（rūach）、ハイ（chay）などがあるが、ハーヤーは「生きている」という意味の動詞、ハイはその形容詞であり、生物体を生かす根源となるもの（生命原理）としてはネフェシュ・ルーアハの二つが主であるといえる。前者は旧約には、750回ほど用いられ、「息、生きた者*、生き物、命、氣、心、死体*、死人*、精神、生命、魂、人*、身¹⁴⁾」などと記される語である。また後者は377回用いられ、「息、命、いぶき、思い、氣、元氣、心、魂、はかなさ、勇氣、靈」などと訳される語である。ここからも見られるように、この二つの語にはオーヴァーラップするところがあり、図示すれば次のようになるであろう。



つまりこれをもって見れば、両者は東西古今にわたる生命現象の根源として考えられた「息、命、氣、心、魂」を共通に持ちながら、ネフェシュのほうは「人間を始めとした生物体に宿る生命力」に重点があり、ルーアハのほうは「生物体を生かしてこれを外から特徴づける生命力」に重点が置かれていることに気づく。

このように考えれば「創世記」の

主なる神は土（'ādamāh）のちりで人（'ādām）を造り、命の息（n'shāmāh chay = 活動中の rūach）をその鼻に吹き入れた。そこで人は生きた者（nephesh chayyāh）となった¹⁵⁾。

という言葉の意味が明瞭となる。人間は本来神にその究極的生命を仰ぐ依存的存在なのである。この言葉を含む人間創造の記事はおそらく王国分裂の時代、紀元前9世紀ごろの南ユダ王国に成立したもので、古代オリエントの創造神話を下敷にしながら、生命の主なる神と人間（ひろくは生物）との関わりをイスラエル風にのべたものと考えられている¹⁶⁾。それゆえこの記事は幸福な時代のつくり話ではなく、民族辛苦の体験をふまえた人間の自己認識だということもできる。

しかし旧約聖書の人間は、生命の意義をこのようにとらえながら、それを観念の世界に抽象させてしまうことなく、神に由来する生命を体のうちに受けとり、体を生かす力に変える媒体として「血（液）（dām）」を考えた。これはいま見た「創世記」の記事よりすると、神に由来する生命（さきに用いた比喻では酸素）が呼吸によって体内に入り、血液によって全身に運ばれ、体を生かす活力となる。ここから「血は生命である¹⁷⁾」という信念が起り、人間における血液循環の中心部としての心臓を生命の座とする把握が生じた。以後血は旧約聖書における生命を表現する語として一貫して用いられ、その射

程は新約聖書にまで達している。

ちなみにこの生命観の関連語として、いわゆる「心」と「からだ」をそれぞれ表わすとされるレーブ (leb) とバーサル (basar) の語義を記しておこう。前者は(旧約に 600 回ほど)「意見、命、思い、氣、心、志、悟り、思慮、心臓、知恵、胸、勇氣」などの意味で用いられ、後者には「命ある者、からだ、肉、肉体、人、身」などの意味がある。それぞれ人間の氣力・体力を総括的(トータル)に表わしている点で、ギリシア・ローマを含む印欧語族の考え方、つまり心身を二元論的に分け、人間のエッセンスを心とりわけ知性にもってくる捉え方とは根本的に相違している。それゆえ旧約聖書の中には、たとえばデカルト以来のいわゆる身心(関係)論¹⁸⁾は問題にならないことになる。

7

前述「創世記」¹⁵⁾の記事には人間と他の生物(ことに動物)界との生命論的な差異は明瞭ではないが、同じく「創世記」の記事たる次の言葉にはその上下関係が記されている。

神はまた言った「われわれ(神の尊厳を表わす複数形とされる)のかたち(tselem)に、われわれにかたどって(d'mūth)人を造り、これに海の魚と空の鳥、家畜と地のすべての這うものごとを治め(rādāh)させよう」。神は自分のかたちに人を創造(bārā')した¹⁸⁾。つまり人間が動物と異り、神に似ている点は、理性を持っているとか、ものを作るといふようなところにあるのではなく、他の生物(ことに動物)を治め、監督し、配慮することにより、いわば他に対する自覚的配慮という点にある。ここに人間が入っていないことは、人間を治めることは根本的には神の仕事であり、人と人ことに男女の関係は従属関係ではなく「ふさわしい助け手(gezer)¹⁹⁾」としての相補の関係であるからである。

そして神が人間を治め導く関係を、前述オリエント神話のイスラエル風叙述の記事¹⁶⁾は

主なる神は人を連れて行ってエデン('eden, 参'ādan「良き生を享しむ」)の園に置き、これを耕させ、これを守らせた。神は人に命じて言った「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪(tōb wārā'c)を知る木(万事を知り、全知全能となる木)からは取って食べてはならない。そ

れを食べるときと死ぬであらう²¹⁾。

という戒めの形で示している。

つまり「よろしい」とか「ならない」とかいった厳然たる根本的基準を人間が自分の意のまま心のままに左右することは自己の死につながるものであって、良き生を享しむためには、自らを超え、自己の生の根元的支えになっているものに従わねばならぬということである。しかもその生命を支える根源となるものは、旧約聖書においては、盲目非情な運命法則ではなく、万物をそなえて生命をつくり、それを支える、それ自体意志と計画とを具えた、純粹生命体とでもいふべきものであり、人はこれを探ねてこれに従い、これに従いつつ、自己の創造的な生を送って行くべきである。通常それ自体が究極的存在であると考えられる自然や歴史の法則の背後には、これを支えるこのような生命があるというのが旧約聖書の生命観の根本をなすものであると考えられる。

さきに見た正義・公平とは実はこのような大きな生命の秩序に支えられているものであって、このような秩序の背後にある生命体を彼らは「主なる神」(Jahweh たる 'elōhîm)と呼んだ。そしてこの神への全人格的信頼とそれに基いた生活こそ旧約聖書が主を「信じる」('āman)とのべた事態である。こう考えれば正義や公平の基をなす生命体への正しい関係、義(tsedeq, tsedāqāh)は信仰の実だといふことができる。旧約聖書がイスラエルの始祖アブラハムについて

彼は主を信じた。主はこれを彼の義と認められた²²⁾。とのべているのはその原型である。

8

しかるに前述の通りこの神と人との原型的関係は守られず、従ってイスラエルも永い繁栄を享受しえず、国は分裂滅亡した。この中で予言者を始めイスラエルの心ある者はこの事態を憂え、その悲運の根底に恵みの神への背反・反逆の事実があることを洞察し、これを「不信」「不義」さらにいっそう深くは「罪」と名づけ、これから離れて神に立ち返るべきことを絶叫した。

この「罪」に相当する三つの原語のうち、第一に「ハッタース」(hattā'th)は「失う、犯す、そこなう、罪を犯す、迷う、悪い事をする」などの意をもつ「ハター」(chātā'āh)から出た語、また

第二「アウオーン」('āwōn)は「悪事、あやまち、こ

らしめ、罪、罪を犯す、とが、罰、不義、不正、よこしま、悪いこと。さらに

第三「ペシャー」(pesha^c)は「あやまち、罪、罪とが、罪を犯す、とが、背信、反逆」などの意を持つ語であって、この三つには共通点もあるが、それぞれの特徴点を見ると、まず「ペシャー」に含まれる「反逆、背信」から、「ハッターズ」に示される「迷い、失敗、喪失」が起り、その結果として「アウオーン」に含まれる「あやまち、よこしま、不義、不正、悪事、犯罪、こらしめ、罰を引き起すという点が目だち、広く「罪」とよばれる行為には、このような一連の行為連関があると考えられる。

予言者たちが、神に「立ち返れ」(shūb)²³⁾、しからざれば滅びる²⁴⁾、とか「ひるがえて (shūb) 生きよ」²⁵⁾とか絶叫したのはこのような事態の中においてであった。そして事実この「シュープ」なる語が「ペシャー」からの百八十度の転回を意味し、その結果、その能動使役態 (hithpael) では「新たに作る、生き返らせる」の意味をも担うものとなっていて、さきにのべた民族再生への深所における転換点となっていることを示している。そしてこのような把握が生命の水源ともいべき神を離れて混沌と頽廃に陥り、ついには破滅にまで至った人間現実の真相をついていとするならば、それは単に国家や民族においてのみならず、個人においてこそいっそうあてはまる消息であることを教えられるのである。そしてまた生命の回復の消息も個人においても国家においても同じであることを示される。

われわれはさきに狭い我意を中心とするわがまま、気ままが、自己を死に導くことを見た。それはいっそう今日の表現でいえば、生命の根源を見失って、近視眼的エゴイズムから、その生命秩序に背反する人間の辿るべき当然の末路だということになる。旧約聖書の人間は単なる不老長寿を神の祝福とは考えず、生命の根源たる神につねにつながり、その秩序を守り、与えられた寿命を生き切って、信頼と感謝のうちに生を終え、未来においても神とともにある希望に万事を委ねることを祝福と考え、死の克服と考えた。彼らにとって死とは単なる肉体の老化の末に訪れる崩壊現象ではなく、心身を一体とした全人格的存在が、神から離れ、(擬人的に言えば)神から見放されて、精神的混沌と恐れの中に迎える人格的崩壊の終着点であった。「罪の払う価は死なり」²⁶⁾とはこのことである。

9

生と死と老化についてこのように考える旧約聖書が、病をも神との関わりにおいて考えたことは当然である。

そもそも人類ははじめ、すくなくとも重大な病氣は、死と同様、自然現象とは考えず、悪魔の仕わざとか神の怒りとかいった超自然的できごとによるものと考えた。それゆえに医療行為もこのレベルでは、これら超自然的な存在や神秘的力に働きかけて健康を回復しようとする意図的行為、すなわち呪術 (magic)²⁷⁾の一部であった。呪術と宗教、呪術と科学との関係を単純に規定することはできないが、いわゆる高等宗教や近代科学といわれるものは、ともに、なんらかの意味における理論性と実証性をおのおのうちに含む点において呪術と区別されることができよう²⁸⁾。しかし人間の心の中には、真理や神の名において、おのれの偏見や利己心を弁護しようという疑似科学もしくは原始宗教的傾向がぬきがたい心情的なものとして巣食ひ、これが迷信や偶像崇拜を生み出すものとなることが多い。

この点旧約聖書の歴史は、正義と秩序の根源としての神への信頼というその本質の性格のゆえに、つねにその根本にまことの生命を損う偶像の挑戦の歴史を含み、その意味での合理性 (理論性と実証性) と相容れる要素を持っている。それゆえ旧約聖書の信仰は、自己暗示や自己陶醉ではなく、醒めた目で現実を見てその現実の底に何が存在するかを観察する目を与えてくれるものである。この信仰は主知主義ではないが、知性を生かす余地を豊かに具えている。旧約の信仰に生きたユダヤ人の中に学問的・知的分野で活躍している人びとが多いこともこのことの一証左たりうるであろう。

しかし旧約聖書の現実の記事の中では、上述の理論性と実証性をフルに生かして科学的側面から病氣や治療に取り組むという事例はなく、もっぱら病氣が救いの枠組の中で何を意味するかという宗教的側面からとらえられている。

そのことは旧約聖書中、病や死をめぐる代表的記事と考えられる次のような箇所を検討することによっても知られるであろう。

- 1、エジプトのアブラハムとパロ (「創世記」12章10—20節) (類例、同書20章)
- 2、ヤコブの組打ち (同書32章22—32節)
- 3、出エジプトの際の過越 (「出エジプト記」11章1—

9 節)

- 4、割礼(「創世記」17章9—27節、「出エジプト記」4章24—26節)
- 5、淨不淨(「レビ記」11章41—47節)
- 6、癩病(同書13章)
- 7、バアル・ペオルの疾病(「民数記」25章1—9節)
- 8、祝福と呪い(「申命記」28章1—30節)
- 9、アシドドの神の箱事件(「サムエル記(上)」5章)
- 10、ダビデの子の死(同上(下)12章15—23節)
- 11、ザレバテのやめめの子の甦生(「列王記(上)」17章17—22)
- 12、アッシリア軍勢の死(同上(下)19章32—37節)
- 13、ヒゼキヤのいやし(同上20章1—11節)
- 14、ウジヤの癩病(「歴代志(下)」26章16—21節)
- 15、ヨブの病氣(「ヨブ記」2章7—10節)
- 16、詩人の病氣(「詩篇」38篇、39篇)
- 17、イザヤの幻(「イザヤ書」1章2—6節)
- 18、老いの守り(同書40章27—31節、46章3—4節)
- 19、贖いの死(同書53章)
- 20、ネブカデネザルの発狂(「ダニエル書」4章28—37節)

これらには4、に見られるような社会学的視点、5に見られるような衛生学的視点、6に見られるような症例研究的視点などが見られないわけではないが、大体は信仰の視点が色濃く支配し、それゆえに祭司や予言者が医療行為の主役となり、宗教的観点からの処理が圧倒的であるといわなくてはならない。

むしろ旧約聖書は医学書ではないのであるから、そこに医学的記述の詳細を求めることは、いわゆる「木に縁(よ)りて魚を求むる」のたぐいであり、日常生活での原始的な医療行為はこのほかにもいろいろあったことと推測される。にもかかわらず全体としては病氣の自然的経過を観察するよりは、その意味を考える方向により多く傾いていたということになるであろう。つまり宗教的人間であったイスラエル人にとって最も重要なことは、病氣の原因を自然現象のうちに求めることではなく、生命の根源とされた神とのかわりの中で病氣にはいかなる意味があるかを悟ることであった。

10

上掲旧約聖書の記事をよく読めばわかるように、イス

ラエルの病氣についての考え方にもいろいろな側面があったが、しかしこんちの医学に見られるような病氣への対処はどこにも見られない。問診に始まり視・触・打・聴と進む診断の過程も記されず、いわんや臨床検査もない。また病氣の原因についての主因・誘因、内因・外因の分析もない。従って病氣の経過の分析も、癩病など一、二の例外を除けば曖昧で、潜伏・前駆・極点・回復・治癒の各期についての精細な観察もない。従ってそこには自然そのものを基盤として、知性をフルに働かせ、理論と実証を積み重ねつつ、科学的学問的に病氣と取り組み、問題の解決に当るといふ成果を見ることはできなかった。その意味では旧約聖書の生命観の具体化はまだ古代オリエントの段階に留まり、学問的生命観の確立とその具体的検証を古代ギリシア、とくにヒポクラテス学派以後に譲らねばならなかったといえる。²⁹⁾

しかし病氣をひろく「人の心や身体の生理的状態や働きが何らかの原因により乱された状態」ととり、健康を「これが整って充実した心と身体の状態」ととることが許されるならば、人間を全体としてトータルに捉え、それと生命の根源との関わりを重視する旧約聖書の視点は、生命の問題、従って健康と病氣の問題を考える前提条件としては、なお極めて有効適切なものではないかと思われる。

むしろ人間を単なる自然物と見ず、これを神仏との関わりにおいてとらえ、従って精神面の安定をはかる宗教的態度は旧約聖書に限られるものではないが、旧約聖書の生命観が、以上見たところから、これに加えて、(1)その深い民族的経験を経て、ひろく人類普遍の原理に通ずる掘り下げを持ったこと、および(2)自然的世界の生命的秩序をも内に含みうる懐の深さを持ったことによって、やがて現われる自然科学的生命観をもおのれのうちに位置づけうる視座を具えるようになったこと、という二つの特質をあわせ持っていたことによって以後も生きのび、未来に開く展望を与える可能性を持つと思われる。むしろ医療の現実は前述したような諸々の限界を持ち、迷信や偶像崇拜といった、人類の通有性を脱しないものも少なくなかったが、時代の試練を経て、他の呪術的宗教がその存在の基盤を失って行ったのちも、なおその有効性を發揮して行くことができたのである。そしてこの点は西洋近代の科学的世界観・生命観が再検討を迫られている時、いっそうその重要性が顧みられてしかるべきではなからうかと思われるのである。

注

- 1) その一例、E, ブルンナー『キリスト教と文明の諸問題』川田 殖、川田親之訳(新教出版社、1982)。
- 2) 「創世記」13章。
- 3) 「出エジプト記」1—22章。
- 4) 上掲「出エジプト記」の記事および「ヨシュア記」23章、さらに一般的には「申命記」。
- 5) すなわち旧約聖書冒頭にある「創世記」「出エジプト記」「レビ記」「民数記」「申命記」の5篇。
- 6) (Heb. 教訓)「モーセ五書」に対して、成文化しないまま1500年にも亘って口伝された慣習法を律法学者たちが集大成したもの。本文たるミシュナ(Mishnah)と、その注釈たるゲマラ(Gemara)の二部から成り、広くユダヤ民族の生活全般を物語る。エルサレム・タルムードとバビロニア・タルムードとがある。
- 7) ききんのためアブラハムがエジプトに移ったり(「創世記」12章10—20節、ゲラル同書20章)ナオミがモアブに移ったり(「ルツ記」)するのもその一例であろう。
- 8) 「創世記」23章3—20節におけるサラの埋葬の記事のごとし。
- 9) 「ヨシュア記」7章の記事のごとし。
- 10) 「サムエル記(下)」11—12章におけるいわゆるバテシバ事件。詩篇51篇参照。
- 11) その一例、「列王紀(上)(下)」およびこれに対応する「アモス」「ホセア」「イザヤ」「エレミヤ」のごとき予言書。
- 12) 上述予言書はよくこの消息を表わしている。
- 13) 「エズラ」「ネヘミヤ」の両書に始まり、「ダニエル」書などを経て、経外典「マカベヤ書」、さらにはヨセフス『ユダヤ戦記』に示される努力苦闘の歴史はその来歴を示している。
- 14) ここに与えた訳語は日本聖書協会版口語訳聖書から採った。ちなみに*印は他の原語との結合に対して与えられた訳、(*)は時としてそのような語があることを示す。
- 15) 「創世記」2章7節。
- 16) たとえばアッカド語「エヌマ・エリシ」第6粘土板(後藤光一郎訳『古代オリエント集』筑摩世界文学大系1, 1978, 126)に見られる神話記述などと比較すること。
- 17) 「申命記」12章6節。
- 18) 拙稿「アリストテレスの生命論の構想」10『山梨医科大学紀要1』1984, 35参照。
- 19) 「創世記」1章26—27節a。
- 20) 同書2章18節。
- 21) 「創世記」2章15—17節。
- 22) 同書15章6節。
- 23) 「イザヤ書」44章22節。
- 24) 同書30章15節参照。
- 25) 「エゼキエル書」18章32節。
- 26) 「ローマ書」6章23節。
- 27) 吉田慎吾『呪術』講談社、1970およびロニ『呪術』吉田訳(クセジュ文庫)白水社1957。
- 28) 拙稿「ギリシア哲学における理論性と実証性」(『ヘブライズムとヘレニズム』1985. 新地書房、165—234.)
- 29) 拙稿「古代ギリシア人の生命観」(『山梨医科大学紀要2』1985.)

Absract

The Old Testament views of life

Shigeru KAWADA

The Old Testament is a condensed document of the history, literature and theology of the people of Israel, who occupied a representative position among the so-called religious races in the ancient world. This article tries to discuss, from various passages of the Old Testament, the distinctive features of their views of life, in constant reference to their history and their faith ; and then tries to find out, with the utmost care to keep in close touch with the text, in what point was it possible and hereafter will it be able for their views of life to become the heritage not only for one race, but for the whole mankind in the world of tomorrow.

Department of Philosophy and Ethics